

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.83

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

松村幹男先生の講義—英語教育史の手書きプリント年表—

松岡博信

日本英学史学会中国・四国支部の重鎮であられた松村幹男先生が80歳で亡くなられたのは、2011年7月23日である。翌年の1周忌が近づく頃に、『私の歩んだ軌跡—英語教育への道—』(全84ページ)と『別冊 私の歩んだ軌跡—英学史論考集—』(全356ページ)の2冊を、奥様である恵美子様より贈っていただいた。奥様はご葬儀の喪主としてのご挨拶時にも、松村先生の英語教育史研究に対する凄まじいまでの情熱を述べておられたが、残されたお子様たちと編纂されたこれらの2冊を読むと、松村先生のご研究をご家族が如何に支えられておられたかが窺われる。

松村先生と最初にお会いしたのは、私が千田町にあった広島大学教育学部の木造校舎を昭和63年5月に訪れた時であった。その年の3月に安田女子高校を辞職した私は、大学教員になるための第一歩として研究生になるために、その許可を得るべく松村先生の研究室を訪れた。あの天井の高い、両壁の書架から書物が雪崩落ちて来そうな研究室では、たまたま三浦省五先生が松村先生とお話をしておられ、それが三浦先生との最初の出会でもあった。三浦先生が総合科学部から教育学部に移籍して来られた頃である。

松村先生は、あの大変優しい笑顔で私を研究生として迎えてくださった。私は松村先生の「外国語教育史」や「英語教育概論」(三浦先生とのオムニバス講義)などを聴講させていただいた。これが私と英語教育史、英語教育学との本格的な出会いである。この「英語教育概論」の授業ノートは今でも大切に保管している。この研究生の時に、松本憲尚先生の文学の授業を、現在の私の同僚である平本哲嗣先生と山川健一先生と一緒に受けていたのを後年知ることになる。また、当時の助手は、今では親友の一人である山口大学の高橋俊章先生である。これらは実に不思議な縁であると思う。

もう一つ、当時の資料で私が大切に保管しているものがある。それは松村先生の「外国語教育史」の年表プリントである。A4サイズ横16ページでステイプラー留めのプリントには、幕末からの英学史、英語教育史が記述されている。当時でも既に珍しくなった手書きの資料で、松村先生の独特の書体の文字が懐かしく、温かい。暑い最中、松村先生はしばしば午前中病院に行かれていたようである。腕には血管注射の痕に貼る小さな四角の絆創膏が毎回のように見られた。

松村先生の講義内容の中で、今でもよく覚えているのは、緒方洪庵の適塾で蘭学を学んだ福沢諭吉が、江戸に出た後に何故英学に転じたのかである。それは松村先生が特に熱く語られたくだけりであったからであろう。諭吉は、安政6年(1859年)に日米修好通商条約により外国人居留地となった横浜の見物に出かけた。そこでは学んだオランダ語が全く通じず、英語で書かれた看板の文字すら読めないことに衝撃を受けた。それ以来、英蘭辞書などでほぼ独学で英語の勉強を始めるに至ったのである。私は諭吉の先見の明というか、変わり身の早さに感心したものである。

松村幹男先生が作成された手書きの英語教育史年表を見ると、広島大学研究生時代の様々なことが、今でもはっきりと心に浮かぶ。そして何よりも、私と英学史学会中国・四国支部のご縁の原点が、松村先生の英語教育史の授業にあることが懐かしく、嬉しい。

(副支部長/安田女子大学)

平成27年度 総会・第1回 (通算72回) 研究例会 報告



安田女子大学 9523 教室にて (2015. 5. 23.)

日本英学史学会中国・四国支部 平成27年度総会、及び第1回 (通算第72回) 研究例会は以下の通り開催され、盛会裏に終了いたしました (参加者20名)。ご参加くださいました皆様に、心より厚くお礼申し上げます。

日時： 2015年5月23日 (土) 12:30 受付開始

会場： 安田女子大学 9号館 9523 教室 (5階) (アストラムライン安東駅より徒歩4分)

〒731-0153 広島県広島市安佐南区安東 6-13-1

支部総会 (13:20~13:50)

議長選出, 前年度活動報告, 会計報告, 会計監査報告, 平成27~28年度役員選出, 新年度活動計画, 他

開会行事 (14:00~14:05) 支部長挨拶 田村 道美 (香川大学名誉教授)

講演 (14:05~15:25)

「英学史研究と私」 田中 正道 (広島大学名誉教授)

研究発表 (15:40~16:40)

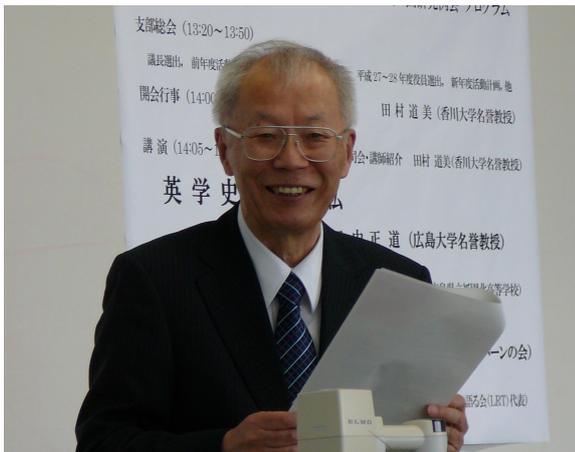
「小泉八雲のオープン・マインド, 広高師 浅地昇先生を通して継承」
古川 正昭 (広島ラフカディオ・ハーン研究会)

閉会行事 (16:45~17:00) 副支部長挨拶 竹中 龍範 (香川大学)
写真撮影

懇親会 (18:00~20:00) 巖島別邸 花の舞 広島南口店

講演「英学史研究と私」

田中 正道 (広島大学名誉教授)



講演を終えて

田中 正道

日本英学史学会中国・四国支部設立時から今日に至るまで、私の個別の研究それぞれが取り持つ縁についてお話をさせていただきました。世はICTのご時世、それぞれの縁は国内のみならず、瞬時に海外まで及ぶことを事例を挙げながら紹介させていただきました。海外との交流では日本のことを正確に発信できる日本人でないと外国の研究者との絆は決して深まらないということをいつも思い知らされました。今回の講演でそのことを力説しようと心に決めておりましたが、拙い話し方でうまく伝えられなかったのではと思います、改めてここで補足(補充)させていただきます。この度、講演の機会を与えてくださいました理事会の皆様にご心よりお礼申し上げます。また、辛抱強く話を聞いて下さいましたフロアーの皆様、ありがとうございました。

田中先生のご講演を拝聴して

保坂 芳男

題目は、「英学史研究と私」でした。最初に、広島支部の歴史と equivalent であると言われたがまさにその通りでこの会に相応しいご講演でした。

田中先生と英学史研究の関係は1977年の広島支部の創立、1979年の広島での全国大会に始まります。全国大会での懇親会で、たまたま高梨先生の側に座りブリンクリーの話をしたところ、後日資料を送られました。高名な高梨先生の対応に感動して英学史研究を始められたということでした。

田中先生のお話はすべて「～の」縁でまとめられました。先生の誠実な人柄から研究の輪が広まっていく過程を紹介されました。一方で本学会からの資料、情報提供にも言及されました。多くの恩師・友人・知人に助けられて歩んだ研究生活であったと締められました。

この学会では、「資料の方から歩いてやって来る」とよく言われます。研究に対して誠実な人柄という磁力が、多くの人間、資料を強力に田中先生に引きつける様子に感銘を受けました。その磁力はますます強力になっているようです。

とても楽しく有意義な時間でした。ありがとうございました。

【参加者の感想】

◆高梨健吉先生からの F. ブリンクリーに関する懇切丁寧な手紙と、松村幹男先生から手渡された W. フィエトルの『言語教育の転換』の原書から始まる知的冒険譚を堪能いたしました。続編を楽しみにしております。<Emma>

◆支部発足時以来のメンバーとしての御研究の歩みを伺い、その時々のご発表を思い出しながらお聞きしました。Viëtor を訳された際にはご惠贈に与りましたが、わが国への改革教授法(新教授法)紹介の歴史中に Viëtor の影が薄いことを不思議に思い、これについて調べて発表することにつながったことを思い出します。これからも御研究を続けて頂き、ご発表下さればと願っております。<Dragon>

◆人間の人生は偶然の重なりによって成り立っていると云われる。田中先生の豊かな体験談(この講演をこのように例えたいと思うが)から、先生の今日の蓄積が、如何に濃密なものであるかが判ってきた。それも貪欲なまでの知識欲に支えられたものであるだけに、説得力あるもの、厚みのあるものとして、圧倒された。<風呂鞆>

◆いつもながら豊富な珍しい田中先生ならではの資料を駆使してのお話で、興味津々でお聞きでき、とても勉強になりました。恥ずかしながらフィエトルについて知りませんでした。先生翻訳の本までいただいたので、読んでみたいと思っています。発表資料最後に書かれている「中国・四国英学史辞典」を先生が中心になって完成させていただきたいと願っています。<JH4DGW>

◆田中先生の英学史研究の進展と共に、資料発掘のいきさつや貴重な手紙の紹介、人とのつながりが広がっていくお話を楽しく興味深く聞かせていただきました。『中国・四国英学史事典』の企画が進むことをぜひ願っています。<Kshu>

◆「英学史研究と私」のご講演はまるで「英学史学会広島支部」の歴史のエッセンスを拝聴しているようでした。田中先生は「学力評価」、「パーマー」というイメージでしたが、それは氷山の一角でした。数多くの「縁」を大切に真剣勝負でご研究に取り組んでこられた田中正道先生は研究者の鏡です。その先生に「縁」させていただいたことに感謝しています。<Rainbow>

◆研究の広がり、縁の深さに感動しました。様々な分野に研究を広げられ、頭が下がります。

<中舛俊宏>

◆「広島ハーンの会」つながりで（メンバーお二人の発表でもあり）、参加いたしました。田中先生のトークは、いつ拝聴しても新鮮で、ワイドショーならぬ、未踏の地に足を踏み入れるドキドキ感、ワクワク感で一杯になります。ご当人のキャリア、奥深さあってのことでしょう。もっともっと聞きたかった～先生のユーモア感覚のあるトークにあやかりたいものです。<村田恵子>

◆田中先生のご研究の集大成を聞いて、パーマーは私にとって未知の世界の人でしたが、こういう形で発表していただいて、驚きと発見があってとてもよかったです。<寺西泰崇>

◆田中先生の温かい人柄が滲み出た温かい雰囲気での講演でした。人脈を利用した研究方法の詳細を紹介して頂き大変参考になりました。ありがとうございました。<保坂芳男>

◆豊富な資料と楽しいエピソードがたっぷりの、深く楽しいご講演をありがとうございました。先生のご研究の道筋から、あとに続く若手がどう英学史にアプローチしていくべきか、お示し下さったように思います。私もたくさん「ご縁」を大切にしていきたいと思えます。<Horse>

◇ ◇ ◇

研究発表

「小泉八雲のオープン・マインド、 広高師 浅地昇先生を通して継承」 古川 正昭（広島ラフカディオ・ハーンの会）

【発表概要】2014年小泉八雲没後110年のテーマは「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン—西洋から東洋へ」で、生誕地レフカダで多様な人々が会し彼の作品鑑賞とオープン・マインド(2009年～)についてシンポジウムを行った。文楽「雪女」と八雲作品の朗読に共感する姿は感動的。八雲は「新しいもの、違ったものに対して



興味を持ち近づいた。…子供たちに常に新しい道を開く場を提供」していくという結論。それは日本でもTV、ネット通信、各地公演で紹介された。私は国内外交流、広島ハーンの会と高校時代の恩師から広高師浅地昇先生の「リップ・ヴァン・ウィンクル」の英語教材作成を通じ、多くの先生の英語教育を通じて八雲文学の意義を学んだ。

【参加者の感想】

◆小泉八雲のオープン・マインドの継承者としての浅地昇について多岐に亘る観点からの考察、大変興味深く拝聴させて頂きました。欲を言えば、浅地昇に焦点を合わせれば論点がより明瞭に浮き彫りになったのではないのでしょうか。<Emma>

◆広島ハーンの影響が東大に於けるハーンの弟子だけでなく、高師(or旧制広高)でそうした先生方に教えを受けた人々をも含めて、顕彰する必要があると、改めて新しい展望を示唆して頂いた。

<風呂鞆>

◆外見からは想像できない(失礼)古川先生の内面にあふれるエネルギーは素晴らしいです。小泉八雲と広島を繋ぐ広高師の英語教師をご紹介くださりありがとうございました。次の機会に浅地昇先生のお話を詳しく聞かせていただくのを楽しみにしています。たくさんスライドもありがとうございました。

<Rainbow>

◆昨年、ダブリンのハーンの旧家を訪ねたので大変興味深い発表でした。こんなに盛んに研究がされているのにも関わらず尽きないハーンの大さを改めて感じさせられた発表でした。<保坂芳男>

◆欲張った発表というべきか、発表題目に係る部分が十分に明らめられているとはいえないように思いました。またスクリーン、ハンドアウトともに小さな字で詰め込み過ぎていて読み辛く、発表の仕方という点での工夫を期待致します。<Dragon>

◆古川氏の内容は、平素からの延長で、学びになりました。<村田恵子>

◆ラフカディオ・ハーンと広島をつなかりを教えてください、驚きました。ハーンの「オープン・マインド」は、まさに今、この時代に通じる大切なものであると思いました。〈中舛俊宏〉

◆ハーン文学の継承が浅地昇先生を通じて、何がどのように継承されたのが今ひとつ不明でした。広島高師に在職された多くの先生方の紹介がありましたが、それぞれの先生相互の関係もよく理解出来ませんでした。再点検、再整理のうえ機会を改めてお話いただきたい。〈もみじまんじゅう〉

◆浅地昇、栗原基、小日向定次郎など、英語教育史の講義で聞いたことを思い出しました。ハーンの商品も読み直そうと思いました。〈Kshu〉

◆小泉八雲の業績を継承して活動していることはよく分かりましたが、タイトルの「浅地昇先生を通して継承」の部分がもっと具体的に述べていただきたかったです。配付資料のいくつかは非常に読みづらかったのが残念です。〈JH4DGW〉

◆広島の英学にとって重要な人物である浅地昇について、これまであまり明らかにされてこなかった履歴を明らかにして下さった意味は大きいと思います。浅地の教育実践にみられるハーン（や栗原）の影響と、それが浅地に学んだ人々にどう引き継がれていったか、さらなる調査を進められ、続編としてご発表くださることを期待しています。〈Horse〉

【研究例会全体について】

◆今回も楽屋裏の諸々の業務を献身的にこなして下さった理事・監事の皆様のご努力下、例会・懇親会ともにとっても円滑に進行していました。爽やかな研究例会でした。〈もみじまんじゅう〉

◆会場への交通が、前回と比べて新白島駅ができて、広島へJRで来る者には便利になり良かったです。懇親会ではくつろいでいろいろお話できましたが、特に私の計画している「岡山県中学・高校英語教育史年表（仮称）」のことを少しお話ししたところ、田中先生から激励を受け、意を強くしました。

お世話いただいた馬本先生、松岡先生をはじめ関係者の先生、本当にありがとうございました。

〈JH4DGW〉

◆立派な施設での例会でした。ご準備ご苦労様でした。〈風呂鞆〉

◆いつもありがとうございます。講演、発表ともに、研究レベルが高く、聞かせていただきありがとうございました。〈中舛俊宏〉

◆田中正道先生と古川先生の発表を聞いて、とても博識でいらっしやうと思いました（当たり前ですが）。私も、もっと精進しなくてはと思いました。堅いイメージを想像していましたが、とてもスムーズで内容の濃い学会だと思いました。〈寺西泰崇〉

中国・四国支部ニュース

≫ 平成27年度支部総会

平成27年度支部総会は、5月23日（土）午後1時20分より、第1回研究例会に先立って行われました。議長として上西幸治会員を選出し、以下の議題について審議を行い、すべて原案通り承認されました。

1. 平成26年度活動報告（事務局）
2. 平成26年度会計報告（会計担当理事）
3. 平成26年度会計監査報告（会計監査）
4. 平成27・28年度役員選出（支部長）
5. 平成27年度活動計画（事務局）

【平成26年度活動報告】

事務局より昨年度の活動について報告しました。内容は、(1)支部総会、(2)第1回研究例会（広島）、(3)第2回研究例会（高松）、(4)『英学史論叢』第17号の発行、(5)『ニューズレター』No.78～No.81の

発行、(6)理事会の開催(第1回、第2回)、の6項目です。詳細は『英学史論叢』第18号(pp.61-64)をご参照ください。

【平成26年度会計報告・会計監査報告】

次ページに両報告を掲載しています。

【平成27・28年度役員】

支部長	田村道美		
副支部長	上杉進	竹中龍範	松岡博信
顧問（相談役）	小篠敏明		
顧問	五十嵐二郎	小泉凡	田中正道
理事	馬本勉	河口昭	鉄森令子
	能登原昭夫	深澤清治	風呂鞆
	保坂芳男		
事務局長	馬本勉		
幹事	隈慶秀	中舛俊宏	能登原祥之
	藤本文昭		
会計監査	堂鼻康晴	平本哲嗣	

【平成27年度活動計画】

1) 研究例会

- ・第1回 平成27年5月23日(土)
(予定通り終了)

広島市・安田女子大学にて

例会当日、理事会および支部総会を開催

- ・第2回 平成27年12月12日(土)
福山大学宮地茂記念館(福山市)(予定)
例会当日、理事会を開催予定

2) 支部研究紀要

『英学史論叢』第18号(予定通り発行)

3) ニューズレター

No.82(平成26年5月, 発行済み)
No.83(本号), No.84, 85(発行予定)

>> 平成27年度第1回理事会

第1回理事会は、支部総会に先立って行われました。協議内容は、(1)支部総会審議内容の確認、(2)平成27年度第2回研究例会の計画、でした。

>> 新入会員

蔵本 有美(くらもと なおみ) 教育支援業

平成26年度 日本英学史学会 中国・四国支部 会計報告

収入の部		支出の部	
繰越金	250,042	通信費	18,828
年会費	140,000	紀要印刷費	58,752
紀要掲載料	8,000	印刷費 (ニューズレター)	4,103
寄付	20,000	事務費	200
補助金	13,000	会議費	19,505
ゆうちょ銀行利子	29	事務用品	3,796
		慶弔費	10,000
		雑費	3,670
収入合計	431,071	支出合計	118,854
		次年度繰越金	312,217

以上、ご報告申し上げます。

2015年5月17日

会計担当理事 鉄森 令子 ㊞

平成26年度 日本英学史学会 中国・四国支部 会計監査報告

各位

本学会の会計を、収入並びに支出に関して、それぞれ関係書類及び領収書等により監査いたしました。その結果、会計報告の通り、全て適正、正確に会計処理ができていることを確認いたしました。

以上報告いたします。

2015年5月18日

会計監査 堂鼻 康晴 ㊞

会計監査 平本 哲嗣 ㊞

平成27年度第2回(通算73回)研究例会発表者募集

平成27年度第2回(通算73回)研究例会を、2015年12月12日(土)に福山大学(福山市)にて開催の予定です。研究発表(持ち時間は質疑応答を含めて60分程度*)を希望する会員は、(1)発表題目、(2)発表者氏名(所属)、(3)発表概要(200字程度)、(4)使用予定機器、以上4点について明記の上、事務局までお申込みください。

申し込み先 ・メール eigaku@tom.edisc.jp
・ファックス 0824-74-1724 (馬本研究室直通)
・郵送 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562 県立広島大学 馬本研究室内
日本英学史学会 中国・四国支部事務局

申し込み締切: 2015年10月26日(月)

* 申込者多数の場合は、時間調整を行う場合がありますので、ご了承ください。

英学史情報ひろば

会員業績, イベントほか

- ◇安部規子(2015).「修験館の英語教育:大正時代に選択された英語教科書について」『久留米工業高等専門学校紀要』30,(2),pp.1-8.
- ◇上杉進(2015).「国家戦略としての文部科学省英語教育改善策と英語教育編年史」『LRT研究紀要』3,pp.54-60.
- ◇江利川春雄(2015).『英語教科書は<戦争>をどう教えてきたか』研究社.
- ◇金田道和(2015).『『CAN-DOリスト』と外部検定試験の導入:その意味するところ』『LRT研究紀要』3,pp.45-53.
- ◇小泉凡(2015).「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン:ギリシャから日本への魂の遍歴」『へるん』52,pp.39-44.
- ◇田邊祐司(2015).『一歩先の英文ライティング』研究社.
- ◇風呂鞆(2015).「八雲会100年,八雲を顕彰してきた人々」『へるん』52,pp.70-77.
- ◇風呂鞆(2015).「服部一三と広島を繋ぐもの:ハーンとの“点と線”」『へるん』52,pp.90-93.
- ◇第177~181回「広島ラフカディオ・ハーンの会」ニュース(2015年5月~2015年9月)
- ◇日本英語教育史学会 第253回 研究例会 2015年7月19日(東京電機大学)

- ・英語教育史入門セミナー「学校史研究・人物史研究のおもしろさ」(河村 和也)
- ・研究発表「明治期~現代の代表的英語教科書9種のリーダビリティ分析:Ozasa-Fukui Year Level, Ver.3.4.2nhnc1-5による分析」(河村 和也, 馬本 勉, 小篠敏明)
- ◇日本英語教育史学会 第254回 研究例会 2015年9月27日(サテライトキャンパスひろしま)
- ・英語教育史入門セミナー「明治時代の教科書ガイド:独案内研究の面白さ」(馬本 勉)
- ・資料紹介「広島高等師範学校教授・杉森此馬のイギリス留学:明治37年の日記から」(安部 規子)
- ・自著を語る「英語教育と戦争教材:江利川春雄著『英語教科書は<戦争>をどう教えてきたか』を素材に」(江利川 春雄)(指定討論者:藤本 文昭)

その他

- ◇外山敏雄(2015).『<明治から昭和まで>日本の英語教育を彩った人たち』大修館書店.
- ◇西本喜久子(2015).『『ウィルソン・リーダー』の背景と構想:“Marcius Willson Notebook”(1865?)に基づいて』『国語教育学研究の創成と展開』(同編集委員会編)pp.71-97.

会員の皆さまによる著書, 論文, エッセイ, 講演, 研究発表や, 英学史に関係する資料等の情報をお寄せください。どうぞよろしくお願ひします。

英学史学会全国ニュース

>> 第52回全国大会

開催日 2015年10月24日(土)、25日(日)
 会場 拓殖大学文京キャンパス
 東京都文京区小日向3-4-14
 主催 日本英学史学会
 問合先 日本英学史学会本部事務局
 神奈川県横浜市鶴見区東寺尾4-11-1
 横浜商科大学英語教育センター内
 大前義幸
 TEL 045-571-3901 (代表)
 FAX 045-571-4125
 Email: a.omaie@shodai.ac.jp

プログラム

10月24日(土) 12:30 受付開始
 13:30 開会式
 14:00 総会
 15:10 新渡戸稲造ビデオ上映
 16:05 特別講演
 「ユーモアと悲しみの人—新渡戸稲造」
 大阪市立大学名誉教授 佐藤 全弘
 17:30 懇親会

10月25日(日) 9:20~ 研究発表

(午前・第1室)

「札幌農学校教授 D. P. Penhallow の英語教育 :
 書簡調査から」(赤石 恵一)
 「ユニオン読本独習書に関する研究」(馬本 勉)
 「新渡戸稲造の晩年—松山事件を中心として—」
 (菅 紀子)
 「越前府中の蘭方医学」(川瀬 健一)
 「お雇い外国人教師の日本海」(山下 英一)

(午前・第2室)

「冒険小説の英学受容」(中垣 恒太郎)
 「朝河貫一とアリス・ベーコンに見る近代化の中の
 日米交流」(増井 由紀美)
 「プロテスタント医療伝道の受容と終焉」

(高畑 美代子)

「庶民の実力—清水卯三郎の事績を追って」

(河元 由美子)

「栄力丸漂流記『東西異聞』について」(茂住 實男)

(午後・第1室)

「横浜外国人居留地のライブラリー：横浜ユナイテッド・クラブを中心に」(齋藤 晴恵)

「岡倉由三郎における言語思想の形成」(平田 諭治)

「日本英学史上の新渡戸稲造 (最近の研究傾向と
 松下菊人会員の研究を基に)」(塩崎 智)

(午後・第2室)

「幕末から明治初期における英文典に関する一考察—
 Participial Construction に纏わる概念と訳語
 の変遷を中心に—」(佐古 敏子)

「『英和对訳袖珍辞書』草稿の影印本の功罪」

(三好 彰)

「『語厄利亜興学小筈』『語厄利亜語林大成』の底本
 を考えるに際して」(神澤 芳賢)

「『語厄利亜興学小筈』『語厄利亜語林大成』:
 原本からのその成り立ち」(石原 千里)

15:45 閉会式

※日本英学史学会(本部)の会員登録をされていない方で
 ご参加希望の方は、支部事務局までお問い合わせください。

※日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部
 とは別に手続きが必要です。詳細は学会ウェブサイトをご覧
 になるか、支部事務局までお問い合わせください。

中国・四国支部事務局より

>> 年会費納入のお礼とお願い

すでに多数の会員の皆様より今年度の会費(一般
 3,000円、学生2,000円)をご納入頂いております。
 ご協力に感謝申し上げます。これからお振込みの方
 は下記口座までよろしくお願ひいたします。

(口座番号) 01360-9-43877
 (加入者名称) 日本英学史学会 中国・四国支部

>> 紀要の配付と販売について

研究紀要『英學史論叢』は、会員の方へ一部ずつ、
 研究論考・研究ノート執筆者には所定の部数をお渡
 ししています。最新号やバックナンバーをご希望の
 方には、一部1,000円(非会員1,500円)にて販売
 いたします(郵送料込)。詳細は事務局まで。

バックナンバー収載の研究論考等のタイトルは、
 ウェブサイトにてご確認いただけます。

[http://tom.edisc.jp/eigaku/bulletin/
 eigakushi-kaiho-ronso.htm](http://tom.edisc.jp/eigaku/bulletin/eigakushi-kaiho-ronso.htm)

≫ 『英學史論叢』 第 19 号原稿募集

日本英学史学会中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第 19 号 (2016 年 5 月発行予定) の原稿を募集します。研究論考, 研究ノート, 英学史随想, 英学史時評, 書評等, 会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては, 以下に掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。

・研究論考・研究ノートを投稿予定の方は, 事前に「投稿申込」をお願いします。2016 年 1 月 31 日までに事務局へ, メールまたはファックスにてお申し込みください。

メール: eigaku@tom.edisc.jp

ファックス: 0824-74-1725

・原稿提出の締切は, **2016 年 2 月 20 日** (消印有効) です。事務局まで郵送してください。

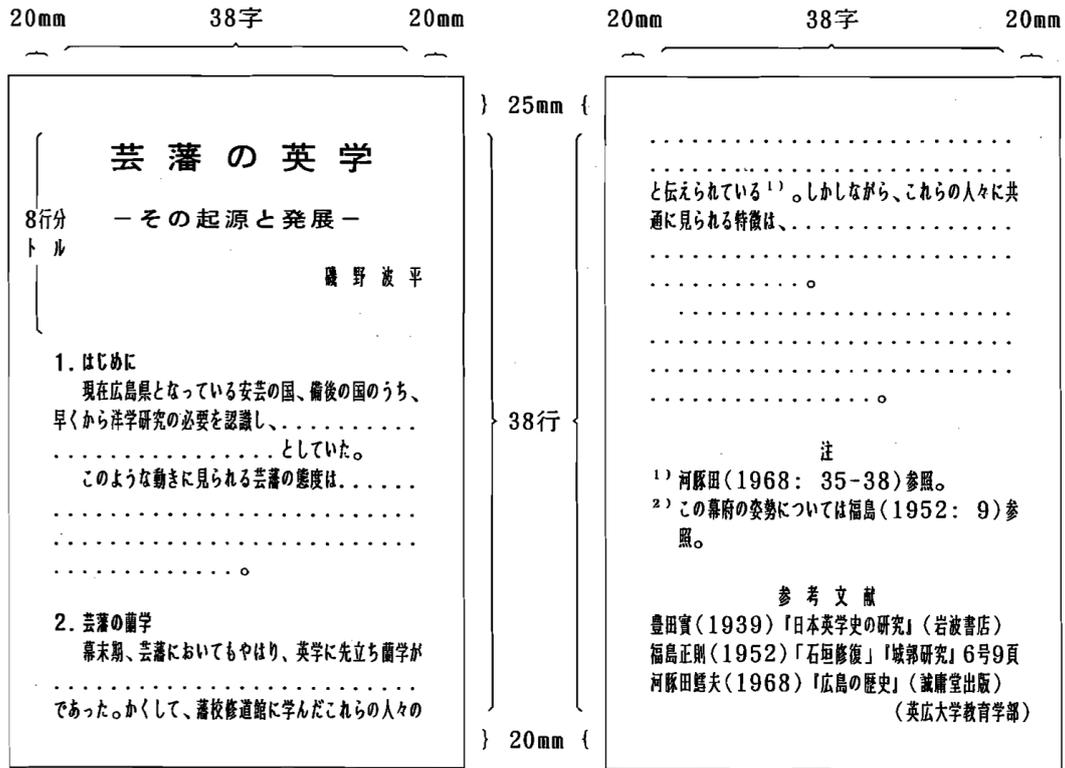
・研究論考・研究ノートは, 正副計 3 部をお送りください。英学史随想, 書評等は 1 部お送りください。

『英學史論叢』 執筆要領

- ・『英學史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考・研究ノート, その他のものとも, 原則として提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き, タイプライターやワープロによる印刷など, いずれも標準書式に従った完全原稿を提出するものとし, 執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし, 原稿用紙等罫線のはいたものは受理しないことがある。
- ・研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会, 日本英学史学会本 months 例会および年次大会, ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副 3 通を提出し, 編集委員会の査読を経て掲載の可否, 書き直し等を決定するものとする。なお, 編集委員会は必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。
- ・研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め, 10 ページ以内とする。
- ・掲載決定後の最終原稿はプリントアウトしたものと合わせ, 電子媒体によるデジタルデータを提出することを原則とする。
- ・研究論考・研究ノートの掲載料は 1 編につき 3,000 円とする。ページ数を超過した場合は, 1 ページにつき 1,000 円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については, 規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。
- ・その他のものについては, 英学史随想, 英学史時評, 新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部の執筆依頼によるものとする。なお, 新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想, 英学史時評, 新刊書評・紹介等, いずれも原則として 2 ページ以内とする。

『英學史論叢』 標準書式

- ・用紙は B5 判白紙を用い, 上部に 25mm, 下部および左右に 20mm, それぞれ余白をとる。
- ・本文は, 10 ポイントないし 10.5 ポイント文字を使用し, 1 行あたり 38 文字, 1 ページ 38 行の書式によって作成する。
- ・本文第 1 ページに 8 行分をとって論文タイトル, 執筆者名を記す。論文タイトルは 4 倍角文字ないし 18~20 ポイント文字を使用し, 中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて, 右に寄せて記す。なお, 論文末に, 右に寄せて, 執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
- ・本文中の見出しについては 1 行アキとし, 番号を付して太字, あるいはゴシック体とするか, 下線を施して見やすくする。
- ・注は, 脚注, 尾注のいずれも可とするが, 本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
- ・参考文献, 引用文献は論文末に一括して示す。
- ・英字・数字はすべて半角文字とする。



広島英学史の周辺(49) このところ、パソコンやスマホで SNS (Social Networking Service) を使わない日はないほど、それが生活の一部になっている。Facebook や Twitter という名のアレである。▲少し前まで、その「アレ」って何？ という状態で、Facebook に登録したものの、使い方の分からないまま過ごしていた。あるとき、小学校時代の同級生から届いた「友達リクエスト」を皮切りに、次々とリクエストが届く。最初の頃は、直に話せる知人だけ「承認」していた（お断りした方、ごめんなさい）。この頃は全く知らない人以外、みんなと友達になる（もとから友達だけ）。とても懐かしい人と連絡が取り合えるようになるなど、楽しいことも多いが、こちらから何を発信すればよいか、迷うことも多い。限定的な公開設定が可能とは言え、公共のメディアであることを意識し、主に公に私の名前が出るようなイベントの広報に使っている。▲Twitter は、発信内容がたびたび社会問題になる。簡単だが注意が必要だ。自分一人でつぶやくための非公開設定もあるようだが、それだとあまり Social な感じがしない。私がフォローしている tweet は、関連サイトへのリンクが提供されることが多く、思わぬ情報に辿りつく（が、知らぬ間に多くの時間を費やしてしまい、後悔する）。こちらも何か、発信する意義を見出したいと思い、同好の士が眺めてくれたらと、手に入れた古書（英学関連の独習書）の書名をメモ代わりに記すようになった。▲「9月23日【直訳】大島國千代(1896).『須因頼氏 小文典直訳』金刺源次(金刺芳流堂). [明治29年3月8日版, 初版は明治20年12月]」, 「9月21日【独

案内]井出 勉 (1896).『スウキントン氏第巻リーダー独案内』花井卯助. [明治29年8月第4版, 初版は明治21年3月]」と、こんな具合だ。今のところ、誰からも「リツイート」や「お気に入り登録」がない。当たり前か。▲せつかくの場合なので、シルバーウィーク最終日に、「9月23日【仕事】がんばろう。」とつぶやき、サザエさん症候群対策のサイトをリンクした。リンク先には、その憂鬱感には「気持ちを切り替えるスイッチ」であり、「それで心が一杯になるのは、他に悩みがない幸せな証拠」とある（「しあわせ知恵袋・パンダの温度」より）。▲ネット上のつながりが元気の素になる。こんな効用もいいね、とつぶやきながら、古書のタイトルに反応してくれる同好の士が現れることを待ち続けている。▲夏季休暇が終わり、慌ただしさが戻ってきた。虫の音が心地よい秋の夜長に英学と向き合い、執筆の手を加速させたいものだ。（馬）

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.83
2015年9月27日発行
発行 日本英学史学会中国・四国支部（代表 田村道美）
事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562
県立広島大学 馬本研究室内
電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)
e-mail: eigaku@tom.edisc.jp
ホームページ http://tom.edisc.jp/eigaku/
郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部